

昭和46年2月1日第3種郵便物認可
平成15年12月1日発行(毎月1回)1日発行
俳句雑誌 沖 第31巻第12号

俳句雑誌「おき」



12
月号

沖
発行所

飛驒路

林 翔

霧霽れむ空に仄かな青みあり

白山を白しと仰ぎ紅葉山

五彩とも言はむ飛驒路の紅葉なる

山気澄みきつて真紅や檀まゆみの実

いかず

私の父も生母も長野県生まれであったが、生母は私の姉と兄、そして生後十箇月の私を遺して、あの世へ旅立ってしまった。縁あって父の後妻となった継母は、茨城県竜ヶ崎町（現在は市）の商家の娘であった。蔵が七戸前もある豪商の家に生まれて乳母はは日傘で育つたのに、店の取引銀行が倒産した為に店も破産に追込まれ、以後の母は東京に出て苦労したらしい。

母が嫁いだ時、父は長野市内の小学校長であった。転任して間もない時であったせいか、入浴は近くの銭湯へ行っていたという。或る時、母が銭湯へ行く支度をして、隣の奥さんに「お風呂にいきませんか」と誘ったら、「いかずう」という答。行かないことだなと思つて、さつさと歩き出すと、隣の奥さんは「行かずう、行かずう」と言いながら手拭と石鹸を持って追いかけて来たので、母は

森よ川よ秋光すらも網模様

水清し中州に仄と草の花

紅葉酔もう醒めたかとせせらげり

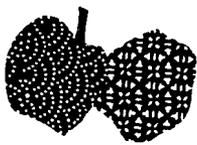
眼に残る紅葉一枝陽は落ちぬ

純子忌も近しと思ふ遠紅葉

狼藉とも言はむ落葉に色・色・色

びっくりした由。母は嫁いで来たばかりで信州弁をよく知らなかったから、戸惑うことも多かつたと思う。「行く」を「行かず」、「待とう」を「待たず」などという方言は長野県だけではないらしいが、標準語だけしか知らない人は打消しと誤解してしまうだろう。語源は「行かむとす」で、それが「行かむず」になり、更に「行かず」となった次第である。意志を表わす語法であり、「むず（んず）」は『平家物語』など、鎌倉時代の軍記物に多用されている。

林
翔



火 天

能村 研三

一年の早さ

十二月は俳句関係の出版社から相次いで「年鑑」が刊行されるが、ここに出す一年間の代表句などの締切りは、まだ暑さが残っている秋の初めころである。この依頼が来ると、つくづく一年の速さに驚かされる。年鑑の他にも十二月号の雑誌は、一年を総括するような企画が総合誌を飾り、いよいよ慌しさを増す。

私は、十二月が誕生日でもあるせいか、この慌しさが性にあっているようだ。元々追い詰められないとうごかない性格なので、締切りまでの時間があると思うと、すぐに仕事に取り掛かれない。締切り間際であれば、何とかそれに間に合わせるように集中力も増してくる。

十二月は公私とも忙しい時期ではあるが、一年の区切をつけるべく、溜まっている仕事は是非とも片付けたいと思う。

一足の草鞋を履いていることにもよるが、時間の使い方の工夫をもつ

飛驒白川郷

煤 艶 の 吊 縄 緊 ま る 火^ひ 天^{あま} か な

合 掌 家 階 下 炉 火 見 ゆ 透 か し 床

合 掌 の 宿 に 炉 守 り の 老 爺 み て

樽 煙 し み て 粗 食 の 炉 辺 の 宴

櫓いぶる出居てふ部屋に寝まりけり

炉煙やネソで結ひあぐ羽交染

鶉日和柿渋染めの糸を干す

句碑守の白山靈峰雪が来て

霜凧ぎて合掌の屋根鎮めをり

御母衣湖に魂を鎮めし夕紅葉

としなければならぬとも思う。

今年は勤務の関係で、土曜、日曜、祝日と連続して休めなくなつたこともあって、句会の予定が大きく狂つてしまつた。同人句会なども私のために日程を変えてもらつたりして、すまないと思つている。

ただ、火曜日が休みとなつて、ここには、余り句会の日程がないので、思わぬ所で自分の時間が出来た。そのお陰で、長年纏めることができなかった自分の第五句集の整理にも着手することが出来た。

こうした時間配分の中、毎月決められた仕事をこなす他に、どれだけ自分の時間を作り出すことが出来るかが問題で、とにかく頑張らなくてはならない。

間もなく新しい年を迎えることになるが、自分に与えられた時間をうまく遣り繰りして、よい仕事が出るように心がけていきたい。

能村研三

蒼茫集



秋 燈 田所節子

秋燈は人のぬくみの色とこそ
夜長の灯ワインに揺れて子等遠し
里川に靴脱ぎ夏を惜しみけり
秋蝶のつめたき色の命舞ふ
孫の絵と菊に包まれ黄泉へ発つ
冬支度鞆に鞆を仕舞ひけり

新居関方面行 洲上千津

関跡のわれも「出女」風の秋
潮入りの湖に関跡鳥渡る
「御朱印」を乗せ秋風の格子駕籠
本興寺
白秋の文机を撫ぜ秋思やや
曼珠沙華軟弱ならぬ詩を継がな
晩年も滾つ血たしか花野駈け

走 者 藤原照子

台風接近取つとききの絵蟻燭
いわし雲浅間蓼科山架けわたし
二周目の走者と遇へり秋の湖
がら空きのリフト名残の松虫草
境涯を異に姉妹の紅葉旅
山姥の魂に触れもし通草食ぶ

兄惜しみて 小沢きく子

一途なりし遠き日露の百度石
身に入むや倒木のごと兄逝きて
白露やこよなき一語子へ遺し
新蕈の香の裏二階喪服着る
深秋の雨へ喪服の足袋きつし
父祖よりの最上段の花野墓地

潮鳴集



無言館

小林久雄

噴煙は山の息づき鳥渡る
二科を見る妖しきものに目を凝らし
秋刀魚買ふ鯛びかりの艶を買ふ
無言館いでて色なき風と遭ふ
笹の葉の褥の軽しきのこ籠

鳥渡る

高橋あさの

ふいに影濃く見ゆる日よ鳥渡る
金木犀無音の闇をひろげをり
空堀は魑魅のすみか木の実降る
目鼻つけたきひと剥きの衣被
おほどかに利根の河口や末枯るる

露けし

柴崎英子

潜かんと空へ身反らす鮑海女
流燈を置く一瞬の水の張り

紅はしる吉野杉箸露けしや
忘られて白曼珠沙華雨を呼ぶ
八つ頭切つて話のややこしき

鳥渡る

小林信江

師を偲ぶ秋日燿ふ碑に触れて
二の腕をさすり花野の冷えをいふ
途切れたる会話をつなぎ虫の声
糸切歯いまもすこやか罽雲
風通すだけの形見よ鳥渡る

時雨蓑

福山広秋

猿ならぬ身も着てみたき時雨蓑
温め酒話の続き促さる
無月には無月の艶を白磁かな
種採りと決まりし茄子の色かたは
秋暑し墓地にも甲乙ありしとは

沖作品



能村研三選

長野

高橋あゆみ

月白やシテの面の息づかひ
秋澄むや八ヶ岳万年の水こだま
一週間どこにねかさうラ・フランス
木の実落つ信濃の空の軽くなる
トロツコの風切り返す溪紅葉
沼主の鱗のひかる良夜かな
朝霧の雫びつしり集乳車
面打ちの端座にかよふ秋の風
かまつかや焼入れの水しゆんと鳴る
雁渡る女波びかりの潮入り湖
待宵のことに火星のかがよへり
芋水車嶺より風の下りて来し
鏡拭き秋思の眉の和らぎぬ
ぬくめ酒夫禁煙をたしかにす
瑠璃いろの高麗瓦秋気たつ

(慶州)

愛知

柴田近江

千葉

谷口みちる

蓑ふかく着て鬼の子のちちこひし
秋天や子供神輿の先走る
父のくせ残りてぬくし菊鉢
落葉松降り流砂ともちがふ音
無住寺に群れきんいろの泡立草
納屋庇小豆干し足すひとにぎり
数珠玉青し遠き日々還らざる
風の盆細きうなじの妖しくも
紫苑咲く喪ごころなだめ盆点前
竹柄杓影のあをめる水の秋
空蟬の抱く樹齢や朝日さす
エプロンに摘む秋茄子の濃紫
烏兜紫紺に確かなる傷み
壇の蓋斜めに閉まる震災忌
草の実の飛んで土偶の目覚めけり

長野

矢崎すみ子

大分

吉武 千束

富川 明子

千葉

深田 雅敏

天網のほつれし跡やいわし雲
ひと住まぬ風の岬の曼珠沙華
ばつた飛ぶ風のしんがり捉へては
秋燕雲の高みへひるがへる
ひとの死のすぐ遠くなる秋桜
秋出水積みし土囊の目より噴き
切通し抜け一閃の帰燕かな

鈴掛 穂

Eメールけふ敬老の日と思ふ
ひと刷毛の紅の残像風の萩
銀漢やいくさの頃の外かはや
黄昏の空に溶けゆく紅葉かな
カンナ燃ゆるランボオ詩集開きし日
林檎断ち割りこの恋を終へむとす

神奈川

菅原 健一

我々の意志桔梗の花に在り
親芋の大き尻据糸月祀る
躑げば影もつまづく良夜かな
落蟬の複眼濡れしままの艶
一心と言ふかなしさの鷹柱
軒たのし嬰の白衣吊し柿

鹿児島

田淵 葉陽

木の実賞で剣遊ばせ谷戸住ひ
待宵や酒壺の贅古代より
深秋の伏してバレーの終りたる
組体操のひとつが崩れ秋うらら
降り出してより一層の踊の手

東京

坂 ようこ

茨城

永井 収子

潮満つるごとく広がり虫しぐれ
拭けばすぐ乾く子の髪雁渡し
欲いくつつなぎて後の更衣
二人ゐて一人は無口秋の風
鮎解いて湖をねむらす山の霧
湖と海つなぐあら居の葉月潮
この辺で力抜けよと白芙蓉
鶏頭花西口にまだ陽の力

愛知

三好 智子

東京

高木 嘉久

新人賞予選句（十二月）

秋澄むや八ヶ岳万年の水こだま
雁渡る女波びかりの潮入り湖
ぬくめ酒夫禁煙をたしかにす
落葉松降り流砂ともちがふ音
納屋庇小豆干し足すひとにぎり
草の実の飛んで土偶の目覚めけり
天網のほつれし跡やいわし雲
切通し抜け一閃の帰燕かな
林檎断ち割りこの恋を終へむとす
一心と言ふかなしさの鷹柱

高橋あゆみ

柴田 近江

谷口みちる

富川 明子

吉武 千束

矢崎すみ子

深田 雅敏

鈴掛 穂

菅原 健一

田淵 葉陽

沖作品 選後句評

*
能村研三

秋澄むや八ヶ岳万年の水こだま 高橋あゆみ

高橋あゆみさんの今年の活躍ぶりはめざましい。掲出の句も堂々としてゆるぎない。俳句はリズムで読ませるものでもあるが、この句を口ずさんでもすつと読者の脳裏に入り込む。高橋さんにとっては、八ヶ岳の風景は日常の原風景でもあるからこそこうした隙のない立て句が出来るのだろう。八ヶ岳は今から百万年以上前に形成されたと言われているが、幾たびかの噴火を繰り返し今の火山群を形成している。八ヶ岳から湧き出た水は、谷筋を通って天竜川や信濃川となつてとうとうと流れていく。自らの原風景を高らかに詠みあげた。

雁渡る女波びかりの潮入り湖 柴出 近江

先日、静岡、愛知の十五周年の記念吟行での句。浜名湖は外海の干満の差によって潮が入り込む潮入り湖で、汽水湖とも呼ぶ。外海とは今切口と呼ばれる所で接し、湖であるのに黒鯛な

ども釣れる。私たちも吟行の折り、漁港にも立ち寄ったが、湖でも海の匂いがして何か不思議な感じをもった。柴田さんも、その不思議さを、中七の「女波びかり」という言葉で表現した。浜名湖はいくら潮入り湖であつても、外海の荒々しい波はなく正に女波びかりというのが適切だ。「雁渡し」の季語の斡旋も効いている。

ぬくめ酒夫禁煙をたしかにす 谷口みちる

長年連れ添う夫婦にとつて、夫の健康は常に心配になるもの。「お父さん、酒も煙草もほどほどに」と口うるさがれながらも心配するものだ。この谷口さんの句は、好きなお酒の方はほどほどに燗をしてあげたのだ。ただし煙草の方はしっかりと禁煙をしたことを確認したのである。何かほほえましい夫婦関係も見えてきて、おかしみも感じられる。

落葉松降り流砂ともちがふ音 富川 明子

落葉松の落葉は光り輝きながら水の針が降ってくるように落葉する。ある時は、吹雪のように斜めに舞い落ち屋根に落ちるとパラパラと音をたてる。道に降り積もれば絨毯を敷きつめたようて歩くともかふかふかして心地良い。この美しさは昔から唄にも歌われているが、空の透明な青さに渦巻きながら落ちてくる落葉松の落葉に、作者はその音を流砂の音にも似ていると感じた。(以下略)